

現代飽食の時代と言われ、食べることには不自由はしません。「毎日がお正月」で40年前にはお正月にしか食べられなかった食べ物が毎日の食卓に上がっています。肉体的な栄養はその頃に比べれば格段と良く成っていることは確かです。それに従ってか日本人の身体つきも良く成り、昭和30年代前半より平均身長で10Cm近く、又体重も10Kg程増えています。しかし反面、若者による凄惨な事件や自殺者が年間3万人と言う結果も出ています。要因の一つに「心の栄養」の欠如があると思うのです、人は身体だけでは生きられません。健全な心が有って初めて人間になれるので、健全な心を養う為の栄養素は絶対必要です。心の栄養は必ずしも美味しいものとは限りません。又必ずしも正しいもの？とは限りません。清濁合わせ飲むと言う言葉がありますが、正にその通りと思います。小生も還暦を越え、肉体的な栄養はそう必要ではなく成りました。これからは「心の栄養」となる食べ物にエンゲル係数を上げて行きたいと思います。では「心の栄養」とは何でしょうか？人それぞれこれと言った定義は無いとは思いますが、身体の栄養にもバランスが必要な様に「心の栄養」にもきっとバランスが必要でしょう。小生も試行錯誤の上、何となく判る様になりました。諸兄におかれましても一度考えてください。

### 回顧趣味的・管球アンプ

心の栄養の一つに音楽を聴くことも必要です。薄暮の明かり窓から差込、何とも言えない怠惰な時間が流れている部屋で、控えめに鳴るボサノバは、激務に疲れた体と心を右手に持ったワイングラスと共に癒してくれます。窓の明かりが序々に暗くなるにつれ、目前のアンプも真空管の灯りがぼーと浮かび上がり至福に時間が過ぎて行く、そうTRやICアンプでは絶対味わえないひと時です。と言っても過去の話、今は某メーカーの安いアンプで聴いていますが、この頃ふとあのアンプ(十年程前浜松に居たころ暇にまかせ手持ちのジャンク部品で造った6BM8シングル)の音が何処か耳の奥から聞こえてくる様に成りました。真空管アンプは現代のアンプに比べ電気的特性は良いとは言えません。周波数帯域等も狭いし、歪もはるかに多い事は確かです。しかしアンプの目的は音楽を聴くことそして心に栄養を摂取することで、ポーと灯ったヒーターの光と、余り良いとは言えないダンピングファクターでドライブされた「エラの声」は小生の琴線を揺さぶりました。良く管球アンプファンに、現代のDCアンプ(スーパーオーディオアンプ)は女房の様な物、管球アンプは委人の様な物と言われます。欠点も有り、金も掛かります。又余りメジャーな存在ではありません、しかしそれらをも変え難い魅力があります。小生もその通りだと思える年齢になりました。先般熊本県八代へ行った時、ふと立ち寄った電気店に沢山の管球アンプが置いてありました。全てそ

この店主が造ったそうで、懐かしい部品がそこかしこに転がっています。話をしているうちに「管球アンプは音楽を聴くアンプです」という言葉が出ましたが、全くその通りと改めて実感した次第です。奥で鳴っていたKT-88PPでドライブされた「タンノイアーデン」が奏でていた弦楽四重奏(曲名は忘れた)が薄汚れた店内に癒しの空間を醸し出していたことを最後の章として終わります。

(注)ラジオ クロネコ 熊本県八代市本町1丁目 TEL0965-32-6188

### ほのぼの癒し(萌の心)

小泉首相が政権を取って5年、日本は自由競争時代に突入しました。勝ち組と負け組等云々、

住み難い世の中に成った(私にとって)ことは確かです。弱者切り捨て、10%の幸せの為に残り90%はノタレ死んでも構わないと言う姿勢かも知れません。と言う様な愚痴はとりあえずそっちへ置いて本題に入ります。今、萌え(モエー・・・)と言う語彙が流行っていますが、前述の時代を反映しているかも知れません。萌えと言えばメイド喫茶、秋葉原には今は二十数軒有るそうで、昨年11月頃は3~4軒だったのにないつの間にか大增殖したようです。以前訪問したのはハム月販の通りを北へ行った☆☆☆、ここは大したことは有りません。もう一軒はメイン通り、中古パソコンで有名なソフマップの近く、ビルの四階にある♪♪♪♪と言う店です。「お帰りなさいませ、御主人様・・・」「何か召し上がりますか御主人様」鈴を鳴らす様なさわやかな声とルンルン・ピチピチのお洋服に迎えられ、おじさんちょっと照れながら入ります。店内に入った瞬間、ピンクとお花に飾られたインテリア、「モエー」の言葉が自然発生的にでたことは言うまでもありません。幸い平日(よく行くねオッサン?)でしたので比較的空いていましたが、休祭日は一杯とのこと、コーヒー一杯がカウンター席で500円・タバコが吸える席は・メイドと話が出来て1000円と成ります(当然1000円席です)。この頃はまだマイナーな存在で店頭のチラシ配りもおずおずとやっていたが、今年5月には完全にメジャーな存在に進化し、駅前で堂々とPRを行い、又その様なコスプレの女の子もちらほら見かけますし秋葉原デビューを目論んでいる歌手の卵のキャンペーンもやっています。(懸命に歌っている可愛い姿を見てCD1枚買ってしまいました、家で聴いたら余りの下手さに気持ちが悪く成りました・・・)今回も1軒探訪しましたが♪♪♪♪店の様に演出はされておらず、コスプレ喫茶と言った方が良いみたいでした。しかし客層は昨年と比べてがらっと変っており、秋葉原オタクに混じって家族連れが多く居ます(中年のおばさんも)。又若い女性同士の客もいました。「あー、大衆は萌えの心に飢えているのだなー」と思った次第です(本当は興味本位?・・・)地方にも出来始め、兎に角メジャー市場に参加しつつあることは確かです。240諸兄も秋葉原へ由かけた際は一度入って美味しくないコーヒーを飲んでみるのも一興です。(萌えー)

### ほのぼの 老犬と飼い主

筆者がかりている駐車場前の家で一匹の犬が飼われています、毎朝出勤時、飼い主が世話をしているのである日「良くお世話なさってますね」と声を掛けたところ、「もう16年飼っています、人間では90歳を超えているのです」と言う応えが帰ってきました。目は全く見えず、足腰も衰えて歩くことも出来ず、歯もほとんど無い為付きっきりで世話をしているそうです。(飼い主は元会社マンで定年退職で時間は充分有るとのこと)それまではその様とは知りませんでしたから「随分おとなしい犬だな」と思っていました。毛並みも艶々してますし、汚れも無く綺麗な犬です。昨今、ペットとして生き物を飼う家庭が増えています。しかし動物もいづれ年齢をとって行きます。可愛い間チヤホヤして大きく成ったり、年齢をとったりすると簡単に捨ててしまうことが多いそうですが、その飼い主はこう言いました。「一日3~4回便の始末や餌やり等大変ですが、今では私の生き甲斐となりました」(愛)

### ほのぼの 貧者の一灯

大阪難波駅から南海高野線に乗り、終点高野山駅下車バスで30分余、真言宗本山の高野山に到着します。弘法大師が開祖と言われ関西のみならず全国の善男善女がお参りしていますが、40年程前は奥の院は女人禁制でした。寺内には大小伽藍が立ち並び、杉の古木の下、古刹独特の霊場の雰囲気醸し出しています。山門から入ったほぼ中間に一軒のお堂があり中で一本の蠟燭が灯っています。風に揺られて今にも消え入りそうですが、開山以来800年その灯は脈々と灯っているようで、「貧者の一灯」と言われています。昔、弘法大師がお寺の開山式の際、献灯を募ったところ、近在近郷のお金持ちが競って応え、沢山の金銭・織物と一緒に捧げたそうです。それはあたかも献灯と言うよりも、己の裕福さ・己の権力の誇示する場と成ってしまいました。献灯も一巡してほぼ終わり掛けた頃、最後に太師は「後一つ残っています。誰かいませんか？」と声をかけました。人々の中には献灯したいのですが、先程までの豪華な供え物も出せず、希望者は居ませんでした。しばらく経って一人の農夫が「おらでも良いかのー、おら何もつとりやせん。だども信仰する心は誰にも負けね一つもりだ・・」と献灯しました。太師は心良く了承し、その場は終わりました。何百と言う蠟燭に照らされたお堂は真昼の様な明るさに輝きましたが、農夫の蠟燭は小さく細い為、今にも消え入りそうでした。それから何年かして弘法太師がこの世から仏の元へ旅立つ時、多くの弟子を枕辺に呼び「お堂の蠟燭はあの一番小さいのを残して全部取り払いなさい、そしてこれから永遠に残す様・・」を最後の言葉としたのです。それ以来何百年、霊山の一角で燃え続ける一本の蠟燭、太師の心が伺える様です。(合掌)

### ほのぼの冬の越前海岸にて(昨年富山へ行った時遭遇した風景)

「おっかー寒いよー、おらもう歩けねー」「綾、そしたら弱音はくでねー頑張っってここ迄来たでねーか・・・」娘の名は「綾」、年齢の頃は十歳前後、連れ添っている母親は三十歳位、季節は十二月半ば、越前海岸は小雪混じりの北風が吹きつけ、海岸を歩く母子を苛め続けます。海岸の石は波頭が風に吹かれて出来た風花で白く染まり、雪で覆われた景色となって、それが一層旅の辛さを増している様でした。母子は何処からきたのでしょうか？二人共背中には箕を羽織、頭には古ぼけた嵩を被り、菰に巻かれた三味線がその過去を物語っているようでした。筆者は思わず、「何処から来て何処へ行くの」と聞こうとしましたが、母子二人の世界には入れません。二人のわらじと脚半は擦り切れ旅の長さを表しています。「おっかーおら腹すいただ、・・・」子供です、空腹に耐えかねたのです。「んだなーせばあそこの岩っこの陰で弁当にすべーだどもこれさ食ったら明日までなんもねーよ」、陸寄りの岩陰、そこが母子の夕食場所です。幸い小さな洞窟があり、風を避けるには絶好の場所でした。「綾後2日で金沢だ、あそこは栄えている街だでうんと稼げるよ」「そうだねーいっぺー稼いで津軽の婆に銭にっこ持って帰れねば」そう二人は津軽の「門付け」だったのです。雪に覆われる冬、津軽から三味線一本で村々街々を廻り幾ばくかの金子を購って春には婆の待つ津軽へ帰るのです。移動するには唯歩くしか無かった時代、母子は何十里も歩いてきたのでしょう。「綾これさ食べ」母は懐から出したおにぎりを渡します。「おっかーは？」娘の問いに黙ってうなづく母、体で温めた最後のおにぎりを美味そうに食べる娘を見る目は慈愛に満ちていました